

自己開示の程度と抵抗感に対する 自己開示内容および学校段階・性別の影響について

要約

本研究の目的は、開示内容が自己開示の程度や抵抗感に及ぼす影響について明らかにすることであった。開示内容を「外見について悩んでいること」「外見についてほめられたこと」「成績について悩んでいること」「成績についてほめられたこと」「人間関係に悩んでいること」「将来について悩んでいること」の6つの内容にし、学校段階や性別などを考慮しながら、これらの開示内容が自己開示の程度、自己開示における抵抗感に与える影響について検討した。大学生（199名）、高校生（331名）の計530名を有効回答者とした質問紙調査を行った。仲良くなりたいと思っている、まだゆっくり話したことのない同性の友人を1人想定させ、各開示内容の自己開示の程度や抵抗感を測定した。検討の結果、「将来」についての内容が自己開示の程度が高く、「外見」についての内容が自己開示の程度が低かった。性差については、女性の方が男性よりも開示していた。しかし、「外見についてほめられたこと」では男性の方が開示していた。肯定的内容は否定的内容よりも開示しづらかった。自己開示の抵抗感については、因子分析の結果、自己開示における抵抗感について、3因子（「評価懸念因子」、「話題抵抗因子」、「反応推測因子」）が見いだされた。肯定性を持つ項目と否定性を持つ項目では、「反応推測」の得点が高かった。これらの抵抗感が自己開示の程度にどのような影響を及ぼすかを検討した。大学生は「反応推測因子」、高校生は「話題抵抗因子」と「反応推測因子」が、特に、自己開示の程度を左右するようであった。